

被虐の女王
アリシア
スカトロ調教編



【登場人物】

◇アリシア・メルクリュス (27 歳)

シュンジュ国を統治する、美しき女王。サファイアのような蒼い長髪と白い肌をたたえた大陸随一の美女と名高い。常に冷静。的確な判断力と、すぐに行動に移す実行力がある。

◇カルム・セーグリッド (21 歳)

赤竜騎士団の要。美しい容姿でラティから従士に選ばれ、夜の誘いも受けるが、任務を淡々と遂行することを第一に考えておりまったく寄せ付けない。

◇メリア・レルムント (17 歳)

魔道学院を主席で卒業した才女。有名な魔法使いの弟子であるが、気が強く、高圧的な性格で敵が多い。美しい容姿でラティから従士に選ばれたが恋愛対象は女性で、カルムを「お姉さま」と慕う。ラティが夜の誘いをするとう平手打ちを見舞う。

◇ナエ・ルシート (16 歳)

清廉潔白という言葉が相応しい、清純な僧侶。

可愛らしい容姿でラティから従士に選ばれ、夜の誘いも受けるが信仰心が厚く、毎回ラティをはっきりと断られてしまう。

◇ラティ・シグルード (19 歳)

女王アリシアの甥。王位継承のため、国民の納得する手柄をたてさせるべく「魔王討伐任務」を与えられた。容姿だけで従士を選んだことを後悔している。

【目次】

これまでのお話

1. 被虐の竜騎士カルム 厳しい鞭と浣腸耐便に悶絶瀕死
2. 被虐の僧侶ナエ 残忍なグリセリン浣腸責めと熱蠟責めに嗚咽
3. 被虐の魔法使いメリア 恥辱の全裸散歩にて足上げて放尿羞恥
4. スカトロ調教の残忍さ
巨大な大量イルリガートルを受けてのレズエネマ
5. 不穏な空気 大臣の共謀
6. 被虐の女王アリシア 医療プレイで施される強力浣腸薬

【これまでのお話】

ラカンズ王亡き後、シュンジュ城を統治するのは大陸に知れ渡る美しき女王アリシア・メルクリュス。

ある日を境に彼女のもとへ、小国の魔王ウェルダンから「おれの女になれ」などといういかがわしい恋文が届くようになった。

「あの痴れ者を討伐して参れ」

「はっ！ 必ずや私、聖騎士ラティ・シグルードが奴を討ってご覧にいます！」

討伐隊が結成されることになり、隊長に指名されたのは同じ王族で甥のラティ。七光りで騎士団長を任されているが、形だけ。まるで実力の伴わない聖騎士。従士を選ぶ際にも、剣の実力より、魔法の知識より、性格より、何より顔の良いことを最優先し女性たちを指名。

これが後々に仇となる。

討伐の旅。旅立ちから九か月が経過。

それまで順調に進んでいたものの、ある日、あまりにも凶悪な魔物「トビ・オーガ」に出会ってしまったことで魔王ウェルダン討伐は失敗となった。

剣も魔法も効かない全身が赤い大柄の魔物に成すすべ無し。
ラティ・シグルードをはじめとしたパーティは全滅。

ラティは命からがら「トビ・オーガ」から逃げおおせたが、従士達はみな捕らえられてしまう……。

息を飲むほどの美女が揃う従士たちである。

「調教の館」という性奴隷調教を行う施設に連行され、様々な淫具が散らばった薄暗い部屋で、お互いがお互いを人質にとられてしまった。

連日、連夜、全身がばらばらになるほどの厳しい調教に悲鳴をあげる。

調教を行うのは凶悪、かつ**変質的**な魔物。

あまりにも凄惨な彼女たちの被虐の光景を、ここに記す。

[被虐の竜騎士カルム]

～厳しい鞭と浣腸耐便に悶絶瀕死～

調教室は拷問具の三角木馬。ユダの揺り籠。アイアンメイデンや、熱湯をたたえた窯まで置いてあり物々しい雰囲気だ。

竜騎士カルムはこの調教室で天井から吊るされ、脚を開かれ逆Y字の格好となっている。

鎖で開かれた脚の間からは人間の格好をした大きな鬼の魔物「トビ・オーガ」カゲトラが、6000cc もの薬液が充填された巨大な注射型浣腸器で竜騎士カルムの尻をいたぶる。

「くはッ、あ、あうあッ！」

浣腸器な太い嘴管を肛門にズブリ、直腸奥まで貫き。そのまま尻を持ち上げるように揺さぶりあげたり、浣腸器ごとクルックルッと回す。

「どうだ竜騎士カルムッ！」

「……く、くはあッ！」

巨大な浣腸器は、その嘴管だけでも人間の直腸の長さと同程度の20センチ。

直径は4センチあり、さながら太いディルドゥ。

直腸奥までディルドゥでえぐられているような苦痛の波がカルムの下腹部に押し寄せている。

「う、ううッ、ぐう……！ 肛門が裂ける……、あむむ」
ーベシャリッ！

「まだ薬液もいれてねえだろうが！」

「くッ、うう〜」

興奮しているカゲトラは浣腸器で肛門をえぐりながらも、臀肉に ベシャリッ！

平手打ちを見舞う。

「へへ。もう浣腸には慣れたか！？」

「……な、慣れる訳が」

「敬語を使えッ」

「ああ、痛い、慣れてなんかいませんッ！」

便意が膨れ上がる薬を注入され、無理矢理に排便させる恥辱責めなど信じられない。あまりにもいやらしく、悍ましさに全身から鳥肌がたつ。

「慣れてないだと？」

「浣腸は吐き気がするほど嫌なんですッ」

それも毎回決まって「大量浣腸」。

胃袋にまで薬液が押し寄せ、吐き気を催す便意に苛まれる。

「へへ！ お前みたいな気の強い女は、スカトロマニアから好まれる！ この館を出る頃には薬液注入されただけで気をやるようにしてやるぜ！」

ーベシィィ！ ピシィィィィ！

「ぐあっはッ！ そんな……こと……。注入されただけでなど……」

「浣腸からも逃げられない尻にしてやる」

「そんなこと……」

ーベシ、ピシィィ！

「わはは、そんなことをもあるんだぜ竜騎士カルム」

竜騎士カルムを責めるもう一体の「トビ・オーガ」タツオミが笑う。

タツオミは長い鞭を持って、事あるごとに竜騎士カルムを叩いている。

この調教室には他にも医療服を着たゴブリンなど魔物が居る。みな薄ら笑いで責められている竜騎士カルムをみて、あれやこれやと言ってからかうのだ。

ーピシィィ！

「い、痛い……。うぐぐ」

「もう何千人も女を調教してきたからなあ。お前の肛門なんざ手取るようにわかる。すぐに開発完了よ」

ピシャア、ピシシッ！

「ああはッ、痛いィィーッッ」

鞭の痛みに全身をうねらすと、背中や臀部に鞭の跡が浮かぶ。鬼の強烈な鞭撃ちは脳天に激痛の閃光が弾けるようだ。

「カゲトラ、いつまでも肛門ぐりぐり遊んでんじゃねえ。浣腸注入したれ！」

「へッ、うれしいくそ。そうらッ！ 浣腸ッ！」

ドクク。ズンムムム。

「う……ッ！ うッ、うむ、あむむ……！」

浣腸器の嘴管で散々に黽られた直腸に、微温い薬液がズンと重く放たれ、竜騎士カルムは違和感に喘いだ。

「竜騎士カルムは調教館だけでなく、浣腸からも逃れられなくなるんだ。おら！」

ピシィィ！

「うむむむむッ」

「どうだ竜騎士カルム。まだいくぞ。むんッ、浣腸ッ！」

ズンムムム。ズッジュ。ドククン、ドクク。

「ああ……。は、はいってくる……。ううむ。くはッ」

「そんな事わかっている。どうだときいているんだ」

ズジュジュジュ、ドクン。ドクン。

「あ、あぐ。腸をなめくじが這っているみたい。です。うぐ、あ、はやい……。も、もっとゆっくり、ああッ」

「ああん？ ゆっくりだと？ こうか」

スジュウウウー——ッ——ッ！！

「ぐおおおおおーッ、は、はやすぎますッ」

ペシィーッ、ピシィィ！

「注文をつけるな、カゲトラの力強い浣腸を味わえ」

ドククク、ドクン！ チュウー……………ッ！

「あうぐ、ごめんなさいッ、あ、あぐ、あぐ、くははぁ」

「苦しんでいるだけじゃ脳がねえぞ。浣腸受けている間はいやらしい喘ぎ、ひとつやふたつあげてみる！」

「そうだ、媚態をつけ竜騎士カルム！ 浣腸されている間は雰囲気だせ！」

ドクドク、ドクン、ドクン。

「あ、あむむ。あ、あ、お腹が……。あむむ」

「お腹がどうした、それがお前の媚態か！？」

ペシィ、ピシィィ！！

「おおお腹が苦しいです、うああ、ああむむ！ あん」

「わざとらしい喘ぎ声、漏らしやがって」

ピシシィ、ピシィィ！！

「い、いだいッ、おお、苦しい。きいい」

「苦しいときこそ笑顔だ。浣腸されたら、ありがとうございます
すだろう」

「きいい、ありがとうございます」

ベシィー、ピシィーッ！！

「が、がはぁッ、ありがとうございますー！」

ピシィィ！！

「ぐあはッ！」（な……何がいけないというの）

「わはは、タツオミ体中を鞭跡だらけにするなや」

「あが、ありがとうございます。ひいい、ありがとうございます
すーッッ、あむむむむ」

「ひきつった笑顔はいらん。それによろ『浣腸ありがとうございます
います』だろう竜騎士カルム！ 浣腸をつけろ、浣腸を！」

「ひぎいい、か……浣腸ありがとうございます！」

「そら、腰をくねらせてもっと言え！」

ドクン、ドクン、ドクン、ドクン。

「お、おぐッ、ぐむむ。か、浣腸ありがとうございます！ 浣
腸、浣腸嬉しいですよ！ カンチョウありがとうございます。
く、う、ううむ！」

浣腸によるさらさらとしたヨダレを飛ばしながらも笑顔をつ
くる。

「そうだ竜騎士カルム、浣腸をされている間は笑顔……！ そ
れこそが浣腸奴隷^{エネマスレイブ}よ！」

恐ろしい鞭のタツオミと、浣腸のカゲトラ。

薬液を注入されたカルムの腹からは雷鳴のように不気味なギョルギョル、ごろごろという苦悶の音が鳴り始めた。

「は……、はひッ……！ うぐ、うぐ、うむむむ！ ああは、苦しい〜、あむむ、浣腸苦しいです！」

ギョルウ。ギョルギョルギョル、ギョルウ〜。

「苦しいのは当然。それが浣腸だ！」

「ううッ！ う〜むむ……。お……お腹が……あふ」

背筋から寒いものが走る。腸を締め上げる浣腸薬「グリセリン」の効果で急激に便意が膨れ上がり、蠕動する大腸、小腸が雷鳴のような異音を鳴らしているのだ。

「ぐっひひ、いい腹音鳴らしやがって。浣腸薬がだいぶ効いてきたようだな！」

「はあ、はあ、うぐぐ。つらい……」

「つらいのが良くなる。ほら、浣腸されている間は雰囲気だせ、ぐひひひ……」

シリンダーに手をかけるカゲトラ。カルムが苦しめば苦しむほど、押す手に力が籠り、手のひらはジットリと汗ばむ。

ドクククク……。ドク……。ドク……。

「ま、まだ浣腸を注入するのですか……！？」

「何を言ってやがる。まだ3分の1もはいいねえぜ！ 浣腸ははじまったばかりだろうが！」

「そんなッ、くうう〜〜……！」

ドクン、ドクン。ドクン。

薬液はすでに 1800cc もの量が大腸に流入しているが、何せ巨大浣腸。

この先はキリキリと内臓を膨れ上がらせる地獄である。

「そんなッ、くうう~~~~……！」

ピシャア、ピシィィ！

「おい、笑顔を忘れるな！ キープスマイル！」

「ぐあはッ、ごめんなさいッ、は……、あは。うむ、あは、あは、ああは、う、うぐ、うむむむむむ」

ギュルウ、ギュルウ、ギュルル。

ギュキュルル！

「うううああッ、はあああ〜、ぐるじ、苦しいい」

乱れる赤髪が額や頬にまとわりつく。

それでも苦悶の表情はできず、脂汗に塗れた美貌で「愛想笑い」のような笑みを浮かべて悶絶。

苦悶できない苦悶が一層のエロスを際立たせているようでもあった。魔物たちは恍惚とした表情で股間を膨らませている。

「浣腸を続けるぜ。そうらッ！」

ドクン、ドクン、ドクン。

ズジュジュジュ、ズンムムムー。

「お……おう、くはぁッ！ も、もうお腹が……。う、ううむ。うつぶ……ッ！ くッ！ そんな強く注入なんて……あむむむむ……！」

3000cc を超すと、シリンダーを押す手に圧がかかる。そこをまた無理に押すのが浣腸の醍醐味だとカゲトラはさらに力強く注入をはじめた。嗜虐色の強い表情でグイグイと押す。

ドクン、ドクン、ドクククン！

「うお、うおううおーーーー！ ああは、お腹が破裂するッ、だめ！ 駄目ーーーーッ、駄目ですカゲトラ様あああ、ぐむむ、うつぶ」

ーペシィッ！ ビシィィッ！

「ぐあはッ、痛いッ、あぐあッ！ あ、あ、あーーーーッ。ぐええ、ゲエエエ」

「また笑顔が引き攀っているぞ竜騎士カルム！ 浣腸されている間はずっと笑顔だと教えたばかりだろう！」

「キープスマイル…」

ーペシィッ！ ビシィィッ！

「ヒギィィ、あぐあぐ、あーーーーッ、あうあうあう、ぐあ」

笑顔を崩すと、すかさず強烈な鞭が飛ぶ。

巨大な注射型浣腸器をもつトビ・オーガと、大鞭を振るうトビ・オーガのふたりに挟まれる残酷な浣腸責め。これには悶絶するばかりの竜騎士カルム。

「浣腸、ひっひひ、浣腸、浣腸で苦しみ」

「うつぶ、ゲエエエッ」 ビシャビシャ……！

以前の誇り高い彼女を知るものは、愛想笑いをしながら浣腸をされているなど想像に難いだろう。

「口から漏らしやがったか」

「はう、あッ、はぁ、はぁあッ、あう、ううう」

ギュルル、ギュルゥ。

ギュルルギュルギュル、ギュルゥ〜!

「うッ! むむ……。あく……。あぁ、ぐはぁぁ」

ギュルギュル! ギュル、ギュルゥギュルゥ〜。

「あああ、あぐッ! くッ、出ちゃいますッ! お願い、あ、う、お腹がいたい、ぐるじい……。ひぐっ、ひぐっ!」

「出ちゃいますだあ? 何が出るんだカルム! またゲロか」

「浣腸の途中で漏らしたら承知しねえぞ!」

「あ、あ、あむむ。便がでます……」

「便じゃねえ。教えただろう!」

ーベシィ、ピシィィ!!

カルムはパクパクと口を動かし言わないようにしていた。だが、鋭い鞭が飛ぶとたまらず羞恥の言葉を叫んでしまう。

「ウ、ウンチです。ウンチさせてください〜ッ!

あ、あ、お腹が……ひい〜! お腹がねじれてしまう。お願いだからウンチをさせてヘェ!」

「わはは! なんて顔してやがる竜騎士カルム!」

「ぐ、ぐるじいーッ! も、も駄目ッ! 駄目え!」

4300cc。竜騎士カルムの顔が真っ赤になり、太い嘴管をびっちり咥え込んでいる肛門が便意を吐き出そうと痙攣をはじめた。トビ・オーガふたりは顔を見合わせ「ここらが潮時だろう」とカゲトラが浣腸の注入をやめ、嘴管を引きずり出しにかかった。

「あ、あ、あ、くはぁ〜……ッ、いッ、ああは！」

抜くときも流石に太い嘴管だ。直腸を裏返され、そのまま引きずり出されるように思えた。

「くはぁ、で、でそう！ ゆ、ゆっくり」

「ようし、全部引っこ抜けるぜ」

「あ、あ、あッ、あーーーー！」

すべてが引きずり抜かれるとチュポッと音をたて、黄色い薬液も逆流。あわててカルムは肛門を引き締めたが……。

ピュッ、ピュルル。

ペシィ、ピシィーーーーッ！

「あが、痛いッ！ くああ」

「てめえ 50cc ほど漏らしたな！」

「ごめんなさいッ！ あ、あぐ、出ちゃう！」

ピュウウ。ピュッ！

「肛門締めろ！」 ピシィーーーーッ！

「ッッッーーーー！！」

必死に耐えている肛門にタツオミの鞭が弾けた。

「このアマ、漏らしたぶんはイチジク浣腸だ！」

「あうう、は、はい……。か、浣腸お願いします。ううむ」

「だめだ尻をくねらしながら、もう一度言え！」

「イチジク浣腸お願いします！ はぁ、はぁぁ、あむむ」

「浣腸のおねだりもうまくなれよ。おい、ドクター。イチジク浣腸持って来い！」

「はい。にっひひひ……」

医療服を着たゴブリン「ドクター・ゴブリン」が、氷でよく冷やされたピンク色のディスプレイ浣腸を用意。

浣腸の知識がある魔物の彼は、浣腸器具の設置、薬液の調合など行いトビ・オーガを手伝っている。

「にひひ。竜騎士カルムさん、よーうく冷えてますよ」

苦しむカルムに鼻の下を伸ばしながら、カゲトラにイチジク浣腸を渡す。

「尻を突き出せ竜騎士カルム！」

「……は、はやく。漏れてしまうッ！」

「へッ、漏らすのを我慢している肛門がブククリ膨れてやがるぜ……！」

「み、見ていないではやく浣腸を！ おお、お願いします」

「おらよッ、くらえ浣腸ッ」

スプ。　ブチュムーッ！

尻を突き出したカルムにイチジク浣腸を挿入。容器を潰して容量 80cc の浣腸薬が見舞われた。

「くああ……、あうう、冷たいッ」

「ヘッ！ 解っていると思うが、勝手にブリッとヒリ出したら
激痛調教だからな……！」

「う……」（激痛……調教……）

激痛調教だけはどんな人間も恐れる。

麻酔無しで歯を削り、脳の痛点を司る部位に電極など。

あらゆる痛みに脳天、大脳新皮質、脳橋までをも襲われるの
だ。

「返事は。我慢するのかしねえで漏らすのか」

「ううぐッ！ 我慢いたしますッ！」

「ようし 20 分我慢だ。泣き言無し、しっかり肛門締めろ」

ーピシィィ！ ピシャア！

「ぐはああッ」（そんなに……。う、うう）

「できるな？」

ギュキュルル、ギュギュルゥギュルゥ！

（あああ、も、もう漏れてしまうッ！）

大量浣腸で 20 分なんてとてもじゃないが無理だ。栓をしても
らわなければ自らの意志とは関係なく肛門が開いてしまうだろ
う。5 分ももつか分からない。

「う！ あ……あのッ、栓を……ッ！」

「アヌスプラグ？ 大人だろう。自分の肛門で耐えやがれ」

「は……いッ！」（あああ、なんてこと……！）

「漏らすんじゃないぞ竜騎士カルム……！」

ギュルルギュギュルゥギュルゥ！

ギュルル、ギュル、ギュルゥ〜！

「うッ！ お〜、むむ……。あうあ！ きいい」

カゲトラの声も聞こえないように、カルムはオコリにかかったようなふるえを裸身に走らせると、全身汗まみれの美貌を引き攀らせた。

「も……もう駄目ッ、あ……。出るッ、出るウウウウ！」

肛門の痙攣を自覚した。ピューと黄色い浣腸液が、きつく締めているはずの肛門の中心から漏れ、内股を伝う。

「おい！ また薬液が漏れ出るぜ竜騎士カルムッ！」

「ごめんなさいッ！」

「緩い尻穴しやがってッ！ ドクター。追加イチジク浣腸２本だ！」

「にっひひひ。そう言われるかと思い、用意しておりましたよ」

「よし、用意がいいなドクター。お前に浣腸させてやる！」

「お……。お……。こんな美女に……。ありがたき幸せ」

イチジク浣腸を２つ手に持ち、舌舐めずりをして肛門を狙っているドクター・ゴブリン。

爆発寸前の尻に、便意の起爆剤たる浣腸。カルムは限界であることを伝えるのはやめ、もはや涙を流して従うのみ。

「ようし竜騎士カルム、ドクターが浣腸しやすいよう尻を突き出せ！」

ーベシィ！ ピシィィ！

「ああはッ！ お尻差し出しますから、ぶ、ぶたないでくださいッ！」

「ならば、もっと突き出せ。割り開かなくても肛門がみえるくらいになあ！」

「は、はひ、浣腸お願いしますッ！ ううう……ッ！」

「おら！ いけドクター」

ーズブリ。ブチュム。

「うッ、くッ！」

「どうですか。にひひひ」

「くは、浣腸ありがとうございます！ ひいい」

「おい尻を逃がすな、もうひとつあるんだろうが！」

「ごめんなさいッ、浣腸お願いします！」

ズブリ、ブチュウゥ〜。チュポ！

「浣腸ありがとうございます！ かは……ッ！」

ドクター・ゴブリンは浣腸な手応えがたまらなかったのか、股間をやわやわと弄りだした

ギョルルギョギョルゥギョルゥ！ギョルルギギョルゥ〜！

——ッ！？？

「ひいい、ぎいいいいッ！？」

(漏れる漏れる、漏れる、漏れるッ！)

ブシャ、ブシャァァ。

「おう……！？」

にやけるゴブリンの顔に、黄色い薬液の濁流がかかる。

ゴブリンが用意していたイチジク浣腸は猛烈な薬効だった。

腸に灼熱感が走り、腸だけでなく内臓すべてが締め上げられるようだ。

「ごめんなさい、ああむッ、あ、あ、あ、お尻の穴が勝手に開いてきます！　お願い栓を————……！」

薬液がショボショボと漏れ出している。

「おい、ドクター……これは」

「にひひひ、ドナン液のイチジク浣腸ですよ……」

グリセリンよりも猛烈な搾腸効果のある「ドナン液」

酷く苦しむカルムに、トビ・オーガも顔を見合わせる。

「どうするよ」

「ドナンか。それじゃあ出させちまうのももったいねえな。ここは竜騎士カルムに腹を焼く地獄をあじわわせてやるか」

「ようし栓をしてやる。だが漏らした分は、ドナンのイチジク浣腸5本だ！」

「きいいい————ッ、は、はやく、はやくウウウ」

ギュルル、ギュルウウ。ギュルル、ギュルル、ギュウウ！

ドクター・ゴブリンはこもまで予測して、ドナン液のイチジク浣腸を5本余計に用意していた。

もう気が気じゃないカルム。

漏れている薬液を押しとどめるよう、つぎつぎにイチジク浣腸が追加されていき……。

「……そうら、お待ちかねのアヌスプラグだぜ。食らえ！」

——ずぶりッ！

「ぐ、痛いッ、さ、裂ける！」

「だったら肛門の力抜け。本当に裂けちゃうぜ？」

「ああふ、ふッ、ふッ、ぐ……、ふッ、ふッ」

「なんだその呼吸は。ゆっくり息を吐き出してみろ」

「は、はい、はあああ」

グギュルル。ギュルル、ギュルウウ。ギュゴゴ。

「ッッああむ、ふッ、ふッ、はあああー」

ズブ、ズブブ。

「ぐおー————ッ！ おう、おう、おう！ いたい」

大量浣腸をされている尻に、肛門栓は苦悶そのものだった。便意を吐き出そうと蠕動する直腸にズイ、ズイと拡張しながら進む三角錐。

「ぐぎ、きいいッ、だめッ、だめええッ！ いたいいい」

「なにが駄目だ、ほらもう少し肛門緩めろ、息を吐け」

「きいい〜〜、だめ裂けるッ！ あッ！」

ズブウー。ズブブ。

「ぐおーッ！ あおおお、おう、おう、くはははああ！」

「ほうら正念場だ。ここが入れば後はズッポリだぜ」

ようやく三角錐の一番太い部分が押し込まれると、伸びきっていた括約筋がキュウッとすぼまった。

「ぐはぁ、はあっ、はあっ、はああ、あう」

「アヌスプラグしてやったんだ、礼を言わねえか」

「こ……肛門栓ありがとう……ございます！」

「栓をされて、いい笑顔じゃねえか。うわははははは……！」



「これで漏れる心配はねえから安心だな。その代わり内臓の地獄だぜ？ 存分に苦しめや竜騎士カルム！」

ギェルウウ、ギェルギェル、ギェルウウ。ギェルルギェル！

「う。は、はいっ、うう我慢いたします、ウウムウムム」

ーベシィ！ ビシッ！

「もう笑顔が崩れているぞ、キープスマイル！」

「はひ……、あは……、あはぁ。ぐるじいいいい」

漏らすことは無くなったが、ドナン液を混合され内臓をかきむる薬液はそのまま。際限なく膨れ上がる便意の解決にはなっていない。

肛門をピッタリと塞いだ栓にはグリセリン原液が塗られているため余計に苦しく、竜騎士カルムは頭をふりたくって悶絶。

「わはは、すごい顔になってきたな！ 真っ赤じゃないか」

「にっひひひ！ なんとも色っぽいですねえ」

腹をふいごのように喘がせ、鎖をギチギチと揺らしては火のような、氷のような呼吸を繰り返す。

このまま我慢ができるのだろうか。

続きは本編でお楽しみください。